

大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレにおける実践の意義について 「再生・海そして川から」をもとに。

The Significance of Echigo-Tsumari Art Triennial 2006 : Based on the Concept of "Regeneration from Sea and River."

丹治 嘉彦
Yoshihiko Tanji

橋本 学
Manabu Hashimoto

We participated in Echigo-Tsumari Art Triennial 2006. The significance of this project lies in that it is a form of the dialog between the artists and the surrounding natural environment of Echigo-Tsumari. It differs from the previous projects in that the production process of the art work gives human dignity.

Keywords : combination

A new wave of art

共同 美術の新しい波

1. はじめに

2006年7月23日から9月10日まで、第三回越後妻有アートトリエンナーレが開催された。このプロジェクトは、2000年より3年おきに新潟県十日町市周辺を中心に開催されているアートプロジェクトである。

このプロジェクトが開催された新潟県妻有地区は、東京都23区程の広さ、約762平方キロメートルの広大な地であるとともに、夏は高温多湿、冬は3mから4m程の雪が積もる土地でもある。また、日本で一番美味しいコシヒカリが収穫される地として、あるいは、信濃川の支流である渋海川流域に点在する美しい棚田の存在において広く知れ渡っている。その上、4～5千年前の縄文中期には日本で一番集落密度の高い地域であったことから、火焰土器が数多く出土し、文化的にも非常に繁栄した地域であったとも言える。しかし、戦後の高度成長期の都市化の波がこの妻有の有り様を変えていった。特に、昭和42年をピークに人口の減少化が起き始め、最高で90万もの人々がこの地に暮らしていたのが、今現在約16万の人が生活している地域へと変化していったのである。各集落を訪れてみると、大きな祭り事等がない限り人の賑わいといったものが見受けられない。お爺ちゃん、お婆ちゃんの姿を見かけることの方が圧倒的に多い。いわゆる、若年層の都市部への人口流出が妻有においてもあらわれたのである。そして、この現実を解決すべく地域活性化と称した様々な事業を妻有において展開してきたわけだが、抜本的な解決には至っていないというのが現状である。

これらのことを踏まえて、妻有地域の活性化を標榜するならば、まず公共事業というカテゴリーからの発想を第一に考えるだろう。地元産業の活性化振興といったことを目的に公共事業を誘致し、実行するという手法。（河川や道路の整備事業等。）そのことが地元を潤すという構図。もちろんこれらのことを全否定するわけではない、それらが実際に妻有地区のある部分の発展に寄与しているは紛れもない事実でもあるから。しかし、既存の価値からの脱却、成熟型の社会への移行が様々な場において進展する現代社会において、たんにそれらの事業がこの地に展開することだけでは問題の解決には至らないだろう。そうではなく、新しい時代を予感させる自己実現型のプロジェクト、いわゆる妻有に眠っている地域資源を見つめ直し、磨きをかけて地域固有の魅力として広く発信し、質の高い交流としての地域造りが妻有において強く求められたのである。

そして、これらのことを基盤として平成9年に新潟県が妻有地域を対象に「アートネックレス構想」を立ち上げたのである。アートによる地域おこし、アートによる地域活性化である。それが大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレである。（もともとは新潟県から発案したプロジェクトではあるのだが、プロジェクトの運営および実施形態はアートディレクターの北川フラム氏が中心となって展開されたプロジェクトでもある。）

我々は、この第3回大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレにおいて、「再生・海そして川から」Regeneration from Cliver and seaと題した作品を新潟県妻有において制作し発表した。本論においては大地の芸術祭において我々が作品を制作し発表に至るまでの実践過程、また、作品がどのように展開するのか、そして現代社会における芸術の位相を述べたいと思う。

2. 展示に至るまでの経緯

(1) 「再生・海そして川から」のコンセプト

作品の内容は、日本海の海岸線から、及び妻有地区までの信濃川、鯖石川、渋海川等の河川を遡りながら流木を拾い集めて視覚化することを中心に位置づけた表現である。

我々は、第1回目の大地の芸術祭から連続して参加しているわけであるが、今回は我々が住んでいる新潟市から信濃川、柏崎市から鯖石川を経緯して、場所場所で漂着している流木を拾いながら妻有に辿り着くことを作品形成の重要な要素と位置づけた。妻有へは、新潟市内から車で2時間弱で行くことが出来る。今までは、途中での出来事等を一切省いて、展示場所においてのみの自然、人、社会といった関わりを築き作品制作を試みてきた。しかし、今回は、我々が住んでいる新潟市（日本海）と妻有（大地）に至る経路を丁寧に遡りながら、様々な環境を確認し、考察していきたいと考えたのである。

作品の根元にあるのは、大地の芸術祭の大きなテーマになっている「人間は自然に内包される。」というビジョンのもとに、循環型社会を表現することにある。具体的には、河川や、海岸に漂着している流木を採取し、直径約10mの円環状の構造体に収納して展示し、そして、それらを会期終了後に、妻有に帰すというプランを立てた。展示場所としては、川が見渡せる場所、人々の営みが自然と共に共存している場所を考えた。作品と川の流れを確認することで作品が海と繋がっているという証しになるからである。また、具体的な作品形成の手続きとしては、単に海や川から集めた流木を再構築して展示するだけではなく、鑑賞者にも我々が歩んで来た環境との関わりを実感してほしいと思って制作を試みていった。このプロジェクトは、大地の芸術祭の会期中で完成して終えるのでは無く、会期後は構造体に収納された流木をチップ化して、少しずつ妻有の山郷の土に返す再生プロジェクトや、焼き物の燃料にした造形ワークショップの企画や、炭に加工する資源としての再利用などを視野に入れた取り組みでもあるのだ。



写真1 小脇集落

(2) 展示場所の決定「十日町市小脇」

2005年6月から、作品の展示場所を探るべく、展示可能なエリアに足を運んだ。展示発表の場の決定事項として、「生活の中で川と密接な繋がりをもった地域」「自然と一体となった作品として感じられる場」「集落住民と交流が出来ること」という三つのキーワードをたてた。

現地及び芸術祭イベン事務所での情報を収集しながら妻有地域を見て周る中で、今回で三回目を迎える大地の芸術祭に初めてはあるが、作家を招き入れ誘致したいという十日町市川西小脇という集落が見つかった。いざ、その集落を見てみると、我々が探し求めていた立地条件に当てはまっていた。集落に面した渋海川は、この集落の生活に密接に関っている。集落の方々は、この川を暴れ川と呼んでおり、その昔、この暴れ川の水を堰留め、川の流れを変えて田んぼを耕し（瀬替田）、地滑りの跡地には植林をした林を造って、自然と関わりながら生活を営んで来たというこの集落が、瀬替の里と呼ばれている「小脇」である。

作品設置場所は、この集落の中心にある小高い丘の上にある小学校の分校跡地である。木造校舎が建っていたが、閉校後、平成元年に火災に遭い、現在、校舎そのものは残っていない。だが、その痕跡として住民の手作りのプール、グラウンド、遊具がある。校舎そのものの存在が無くとも、また、特別な利用は現在されていなくても、この地は、小脇の人々が育った特別な記憶が残っている場所でもあった。

(3) 小脇集落の現状

世帯数14軒、平均年齢は70才にもなる高齢化が進んだ地域である。山里の孤立されたこの集落の多くの住民は、効率の悪い棚田の農作業、冬の厳しい生活環境化で、自分の子には後継をさせていない。集落に残った老夫婦は、共同体である集落の維持に不安を感じながら暮らしているのがあった。

我々は、展示場所の交渉をする為、小脇地区の区長さん宅を訪ね作品意図を説明してみると、アート作品に触れることの他に、人との交流、小脇の地を知ってもらいたい願いから、非日常となるアートイベントに参加したいという気持ちが強く伝わって来た。だが、我々がこの場所に作品展開を試みる為には、集落の方々全ての御理解を得なければ成らない。そこで、区長さんの了解を得てから、住民への説明会という形で、十日町市支所の方、大地の芸術祭事務局の方も交え、交流会を開催していった。その中で、人との交流を深めながら制作を試みる新たな芸術活動の理念、そして、今回、我々が提示した海と山とを繋げる循環型社会のメッセージを込めた作品「再生・海そして川から」の展示計画のプレゼンテーションを行ったのである。

地域連繋のプロジェクトではこの交流会がとても重要な意味をもつのは言うまでもない。作家が、住民側との交渉をプロダクション側に任せっきりにすると、細部が伝わらず、聞いていない。話しと活動が違うということが起こってしまい、活動に大きな支障がでてくる。一つの些細なボタンの掛け違いによって、ことが進まなくなるのである。しかし、幸いにもここ小脇では、生活レベルにおける共同意識が深く、ほぼ全世帯の方々が、作品制作のための説明会に集まって頂くことが出来、そして一人一人に、主旨を伝えることが出来た。この様な説明会を幾度か行うことによって作品への理解が深まるとともに、住民との絆がより強固なものになっていった。



写真2 作品説明会 十日町市小脇公民館

(4) 河川からの流木集め

雪に覆われる時期を迎える前に、流木集めという制作第一行程がスタートした。山間部では鯖石川、渋海川の岸辺に漂着している流木の採取。信濃川河口での採取。海に流れ海岸に打ち上げられた流木の採取。というような、山、海、両方から拾い集める採取計画を建てた。当初、流木を採取する場所の情報は我々には全くといってなかったので、地域コミュニティーを利用し情報を集めていったのであった。

山間部の河川では、集落の方とブッシュを除けて獣道を使って護岸に下り、川岸に漂着した流木を拾い集めた。また、降雨によって増水した河川の水位が引くのを待ち、流木採取するなどといった困難な作業となる。しかしながら、河川の下流域では護岸整備の影響で、漂着物が溜まる場がなく流木の採取が思うように出来なかった。そのため、信濃川河口の河川事務所の協力を得て、水門に漂着した流木を水揚げして処理している場にての採取となった。

河川からの流木採取は、この様に、困難な過程となったわけであったが、作品のテーマにある循環型社会をキーワードとした作品を築き上げるためには避けられない大事な制作行程であったのである。



写真3 流木採取 左) 渋海川 右) 鯖石川

(5) 海からの流木採取

展示場所が4メートル近い雪で覆われている一月から三月の間、我々は海岸線をこと細かく散策し、打ち上げられた流木の採取を行っていった。採取した流木の分布を整理してみると、沖合にテトラポット、波消しブロックが置かれた場所には漂流物はあまり打ち上げられていない。また、海水浴場などは、漂着物の処理がされているせいか、少なめであった。小さな漁村や港周辺でも、作業に支障が無いように清掃されているせいか少なめであった。しかし、この様な場でも、一目を裂け、漂流物の最終処理を行わず、片隅に山のように集められている場も存在していた。流木の採取した大半の場所は、人が出向かない沿岸整備されていない海岸線に集中していったのであった。

我々が採取した海岸線は国定公園に指定され県内屈指の景観地である。にも関わらず、至る所に、漂着物が放置されたままの凄まじい光景が存在していた。流木などの自然物は想像つくが、そこを覆っている物は、海と緑遠い粗大ゴミや、人工的に持ち

込んだ漁具や危険物などである。流木を集めながら、この状況はどうして出来るのか、何が原因なのか、溜った漂流物は誰が処理するのか、環境汚染の現状の様を見せつけられ強く考えさせられた。

我々は今回、水辺の環境との関わりによって制作を試みているが、自然と共存しなければならない人間社会では、人としてのモラルを持って対処しなければ成らない基本的な考え方が、もっと必要である。我々の作品を手伝った学生、住民などの参加者は勿論、鑑賞者にもこの気持ちを共有してもらいたい願いで、この作品の制作を試みていった。



写真4 流木採取 佐渡弥彦米山国定公園内海岸

(6) 流木運搬

現地の雪解けを待ち、工房脇に冬期から集めていた流木、約96㎡の運搬を5月16日から5月23日の間で行なった。海と山との距離を感じながらトラックで幾往復し、制作資材の運搬を終えたのである。

流木の数量の決定は、部分的に仮設した構造体に実際に流木を積めるといったシミュレーションを行ない、必要な流木の量をトラックの荷台の大きさを尺度に単位化したものである。最終的な流木の量は構造体に詰めながら確認することとなる。



写真5 流木運搬 積み込み (新潟大学)



写真6 流木運搬 積み降ろし (小脇)

(7) 現地組み立て作業

1) 作品設置のための整地測量

6月9日・10日

この作業は、日頃、土木工事に関っている集落の方の指導を基に作品設置場所の水平基準面を造るための測量を共同作業で進めた。

2) 構造体のユニット制作・交流会

冬期の間、工房で部品加工を進めて来た部材を組み立てていく作業である。14ユニットの流木が収まる枠を制作。集落の方の開いているビニールハウスを一時的に借りることが出来、組み立てた構造体ユニットの保管場所とした。

今回の合宿では、作品設置までの段取りを確認するため、住民との交流会を開くことが大きな目的でもあった。交流会では今後の制作行程の確認と、資材運搬及び整地作業の打ち合わせ。そして、集落の方々と共に作品の設置完了時に祝うオープニングイベント案など、一連の制作の流れの再確認をするためであった。



写真7 ユニット制作・保管場所

3) 小脇小学校跡地に構造体設置。

6月16日・17日

この合宿では、主に残っていた整地作業を行なった。緩やかに傾斜した地面の草の根を切り、スコップで掘り下げ、水平器と水糸を用いて設置面を造っていった。そこに、円環状に一個飛ばしに、半分の14ユニットの設置と、アプローチとなる階段の骨組みを組み立てた。構造体と地面との間には、腐れ予防と、設置面の安定をさせるため、平たい敷石を置いた。



写真8 構造体ユニットの配置

4) ユニットの連結

6月19日・22日・26日

大きい作品、そして野外作品では、制作しながら、色々と問題も浮かびあがる。耐久性、作品の取り回し、制作手順。階段脇ユニットの部材の設計ミスが見つかった、図面上で確認してみると簡単な角度ミスであった。この部品は工房に持ち帰り修正する。その他のユニット間の連結は敷石を置いた測量を充分に行なったため、スムーズな作業となる。



写真9 構造体ユニットの連結

5) 構造体の表面処理 6月30日

円環状の構造体えの白木の木わくの表面処理としては、腐れ予防と、白い流木とのコントラストを強く見せる為の両方の視点で素材を探した。自然に返す作品コンセプトの中で、科学塗料では無い着色方法を模索してゆく過程で、佐渡地方の漁村などで用いられている焼き塀の表情を取り入れることとなる。プロパンのガスバーナーを用いて構造体ユニットの内側、外側全て黒く焼く作業を始める。梅雨の雨間を狙い作業を進めるが、湿気を含んだ材は、なかなか炭化できず、苦労した作業となった。

アプローチの階段部も表面を焼き、防腐処理の後、現地で調



写真10 構造体表面処理

達した土砂を盛り込み地固めを行い築いてゆく。表面は、大地と質を合わせた植栽を新たに試みる予定であった。造園関係の方と相談して、この場、この時期に生育が可能な幾つかの植物を挙げていただいた。その中で下草として、踏まれても痛々しくない、また、現地に自生しているシロツメグサを候補に選んだのだが、シロツメグサの種でさえも、オーストラリア産が用いられており、日本産は無い現実を知った。外来種の種をまい

て此処小脇の地の自然環境のバランスを崩してしまつては、大地に返す循環をテーマとした作品に反する行為になってしまう。そこで、外来種の種をまいて植物を自生させるのでは無く、大地に根ざした植物の移植という方向でプランは纏まっていた。



写真11 階段部土砂入れ



写真12 階段部の仕上げ

6) 流木詰め込み作業

7月7日・7月8日・7月12日

引き続き、構造体の表面処理を行いながら、出来た場所から流木を詰め込んでいった。構造体ユニットの中心部には大きな流木及び汚れた流木を詰め込み、表面に見えてくる場所には、一つ一つの流木の形、色合いを吟味し配置していった。農作業で用いる運搬機械を使って流木を移動する作業など、住民の方にも作業に加わって頂き、予定通りに作業が進んでいった。



写真13 構造体表面処理



写真14 流木の詰め込み

見当をしていた流木の量は、程よい感じで量的には十分であったが、表面に見せる乾いた白い流木が、少量足らず、再度流木を集めることとなる。そして、会期前の7月12日には、直径10m、高さ3m50cmの構造体内に、流木を収め入れることが出来た。流木を積み上げ高さは、この地域の冬の積雪の高さに合わせている。これは、鑑賞者に冬の厳しい環境をイメージしやすい様な観点で決めた。

残った流木や、会場周辺の清掃、草刈りを集落の方と進め、オープニングイベントの準備へと、ことは流れて行った。



写真15 作品設置完了



写真16 オープニングイベント餅搗き

(8) オープニングイベント 7月29日

オープニングイベントに向けて、以前から、小脇の特産、行事など独自の風習がないか交流会などで、集落の方から話を聞かせて頂いていた。その中で、この地域での特産物は、やはり、お米である。魚沼産の餅米で餅搗きとはいう発想で話を挙げてみると、この集落では祝事の際、よく餅を搗いていたことや、土用の丑の日にも餅を搗く風習が見つかった。最近では集落の人の高齢化が進み、1人暮らしの家庭も多く、また、様々な食材に溢れた現代社会では、夏の餅搗きは遠ざかった存在になっていたのである。だが、今回のオープニングイベントでは、人との交流イベントである。力を合わせて多数の人と行う餅搗きは魅力的な行事であり、集落の方と共に我々も楽しみ、また、鑑賞者には集落の営みを感じ取って頂く良い機会になると考え、土用の餅搗きという形で決めていったのであった。

準備にあたっては、立派な蒸し器や、臼、杵といった道具は直ぐに揃った。オープニングイベント当日は、集落の方々、我々双方、共に早朝から作品展示場所に集合し、集落の方の慣れた手つきを参考にして準備が進む。この集落で収穫した魚沼産の餅米で、集落の方が作った炭で火をおこし、餅米を蒸し、共に餅を搗いていった。出来た餅は、この地で取れた笹にくるみ、笹餅としてこしらえ、訪れた鑑賞者に振る舞うイベントとなったのである。

もう一つの仕掛けがライトアップである。これも、交流会の席で集落の方の意見を取り入れたものであった。都会には闇を感じる場所が少ないが、ここ小脇には本当の闇を体験出来る場があり、虫の声を聞きながら沢山の星を眺めることが出来る。



写真17 ライトアップ



写真18 ライトアップ

この地の自然環境を感じながら夜空の下での交流会も良いという話題から、光の演出を加えた作品鑑賞を行うこととなった。設置したスポットライトは10灯、これに加えロウソクの灯り、色温度を変えた樹木のライトアップにより空間に奥行き感を出すライティングを試みた。作品を照らしたスポットライトは調光器のプログラムにより制御させ、闇のシーン、流木が浮かび上がるシーンなど光に動きを加えた演出としたのであった。

このようにして、オープニングイベントの密度の濃い一日が流れていった。作品を通して、鑑賞に訪れた方、我々と手伝いのスタッフ、集落の方々と、普段出会うことが無い、様々な人と繋がりが出来たことにイベントの成功を感じた。

(9) まとめ(作品の設置までの行程にて)

三回目を迎えた大地の芸術祭は閉幕した。トリエンナーレとして今後の開催規模はまだ公表はされていない。予算面から規模の縮小とも噂されてはいるが、確実に、自然と一体となり、人との繋がりにから生まれた芸術表現の新たな価値観は築かれていると感ずる。

我々も、大地の芸術祭の期間中、様々な方々と関わる事が出来た。準備期間を入れて、2年間の時をこの作品とともに歩んできたのだが、この会期中、特に感じたことに、訪れた人の変化に気が付いた。鑑賞者は、美術関係者のみならず、作品を探しながら懐かしい農村風景を楽しむ年配の団体の方々や、子ども連れの親子といった様に、幅広い年齢層の人々が数多く、新たな観光資源を楽しんでいる姿が随所に見受けられたことである。だが、一方、現地の集落の方の視点で見つめてみると、開催時期の賑わいと、厳しい環境の中での営みが続いていく会期後の現実に、一層の寂しさが伺われていることだ。



写真19 「再生・海そして川から」

プロジェクト作品「再生・海そして川から」は、コンセプトで示したように、ここが中間点であり、会期後の流木再生計画はこれからである。今後の活動によって、造って、置いて終わってしまう一方的な芸術表現からの逸脱と、新たに時間軸の要素を加えた、環境・人・社会との結びついた多角的な芸術表現の可能性を探るべく思いで、遂行を進めてゆく考えである。そして、大地の芸術祭の会期後も、引き続き、この集落で出来た関係を絶やすことなく、コミュニティーを築いていこうと考えているのだ。また、こうした考えは、慈善活動を主目的としたものではなく、あくまでも、今回の作品プランに組み込んでいる循環型社会をテーマとした表現の着地点を探るためである。必然的に地域コミュニティーに関与し、育むことは、ここでは、付加した要素として見てほしいことを付け加えておく。

3. おわりに

現代社会において価値の有り様が見えにくくなっている中、芸術表現においてもそのことは例外ではない。美術館等において鑑賞する絵画や彫刻。これらは額縁や台座がそれに付随していることで自己完結し、それを鑑賞するというシステムこそが20世紀における芸術の有り様であったわけであるが、大地の芸術祭において展開しているアートの位置づけはこの類にはあたらない。展示されていた作品それぞれが、妻有の豊かな自然そのものを作品の中に位置づけており、白い壁面や眩しいスポットライトが作品の背景にした芸術作品を展示するという空間からは、完全に独立した作品構成となっているのである。例えば、作品を成立するための施設が整備されているわけでもなく、また、制作するための人的支援が十分に整っているわけでもない。逆に、そのような場所をあえて作品成立のための核にしているのである。しかし、このようなアートの制度上の成り立ちから乖離しての制作は、展覧会に参加した作家にとって試練と同時に様々な気づきをもたらしてくれた。例えば、気候の問題で、実際に現地に入ってから制作は、雪解けを待って5月から制作を開始することとなったり、移動時間がかかるといったこと、体力的なハンディキャップ等。しかし、このような事実よりも何より有効性があると思えることは、妻有という特別な土地、そして、そこで生活している人々との濃密な出会いにあると思える。

現代社会においてアートは様々な形式が存在しているとはいえ、まだまだオフィシャルな空間において、その実体を鑑賞することが既定路線と言えるだろう。美術館や画廊と言ったシステムがその義望役となることで、作品を飾るという一方通行的なことが理想型ともなっている。言い換えれば、芸術のための芸術となることで自己目的化してくという事実。このシステムの有り様が一般的な芸術の価値としてとして認識していると言っても過言ではない。ここで断っておくが、このような美術館制度と言ったものを真っ向から否定するつもりはない。様々な芸術作品が、今生きているこの時代を表出することの意義は決して侮れないし、その器の機能が今の文化を次の時代に伝えるという役目すらも担っているに他ならないのだから。しかし、今回我々が行った行為は、アートプロジェクトという手法を使っただけの作品形成である。一般的にアートプロジェクトにおける一つの意義として、一方通行的、また啓蒙的スタンスから行うというのではなく、他者や他領域と相互交信する関係性によって浮上し形成するものを一つの定義としている。ならば、アトリエで作品を制作し、それを現場に持ってきて設置するという既存のスタイルの踏襲は、この妻有においては完全に不釣り合いとさえ言えるだろう。妻有で作品を制作するということは、共働・共同という名のもとに、さまざまなものや出来事の一体

感を、妻有という特別な土地に出現させることが何よりも意義のあることなのである。大地の芸術祭というプロジェクトに関して言うならば、既存のアートそのものの閉塞感を如実に表していると言っても過言ではない。現状のアートが目的を遂行することに終始してしまい、大衆そのものを置き去りにしていることを考えるなら、この大地の芸術祭こそ新たなアートの道しるべとなりえるのかもしれない。そのことを我々は十分に踏まえつつ作品を制作し発表した。そして、行為の実践が、現実を変容させるということの幸福感の実例としてこの妻有に宿ったのだと強く認識した。